

主な任意接種

種類	接 種		
	対象年齢又は対象者	回数	間隔
季節性 インフルエンザ	生後6か月以上で定期接種（B類）の対象者を除く全年齢	(毎シーズン) 2回 (13歳未満) (毎シーズン) 原則1回 (13歳以上) (ただし、医学的な理由で、医師が2回接種を必要と判断する場合はその限りではない。)	2～4週間 (免疫効果を考慮すると4週間が望ましい) (13歳以上で2回接種の場合) 1～4週間 (免疫効果を考慮すると4週間が望ましい)
おたふくかぜ	1歳以上	1回 注1)	
B型肝炎	(1) HBs抗原陽性の母親から生まれた乳児 注2)	3回	生後0、1、6か月
	(2) ハイリスク者（医療従事者、腎透析を受けている者、海外長期滞在者など） 一般の任意接種者	3回	4週間間隔で2回、更に1回目から20～24週を経過した後に1回
	(3) 汚染事故時（事故後のB型肝炎発症予防）	3回	事故発生後7日以内 その後1か月後及び3～6か月後
A型肝炎	全年齢 注4)	初回2回 追加1回	2～4週間 初回接種後 24週経過後
黄 熱	9か月齢以上	1回	
狂犬病	全年齢	曝露前3回	1回目を0日として 0、7、21日又は0、7、28日
		曝露後4～6回	1回目を0日として 4回接種：0（接種部位を変えて、2箇所に1回ずつ、計2回）、7、21日 5回接種：0、3、7、14、28日 6回接種：0、3、7、14、30、90日
破傷風	全年齢	初回免疫2回 追加免疫1回	3～8週間 初回免疫後6か月以上の間隔（標準として12～18か月までの間に）
髄膜炎菌	2歳以上56歳未満（備考参照）	1回	
百日せき・ジフテリア・破傷風3種混合（DPT）	5歳以上で初回免疫が完了している者	1回又は2回	DPT-IPV 4回目接種後6か月以上あける
不活化ポリオ（IPV）	4歳以上で初回免疫が完了している者	1回	DPT-IPV 4回目接種後6か月以上あける
帯状疱疹 (水痘生ワクチン使用の場合)	50歳以上	1回	
帯状疱疹 (帯状疱疹ワクチン使用の場合)	50歳以上	2回	2か月間隔で2回 標準として1回目の接種から2か月後に2回目の接種
9価ヒトパピローマウイルス	9歳以上の女性	3回	通常、2回目は初回接種の2か月後、3回目は6か月後に接種する

注1) 日本小児科学会では、2回が推奨されている。
 注2) 母親がHBs抗原陽性の場合には、健康保険適用。
 注3) 新生児に対する筋注の部位は、大腿前外側（上前腸骨棘と腸骨脊を結ぶ線の中点付近で、これより内側＜腔側＞には片寄らない）に行う（日本小児科学会誌90:415、1986）。
 注4) 世界保健機関（WHO）ガイドラインでは、1歳以上の小児への接種が推奨されている。

種 接種量	方法	備考
6か月以上3歳未満 各0.25mL	皮下	KMバイオロジクス、飯大微研、デンカのワクチン
3歳以上 各0.5mL		
1歳以上3歳未満 各0.25mL		
3歳以上 各0.5mL		
	皮下	第一三共のワクチン
0.5mL		
各0.25mL	皮下	・ 副反応は少ないが、接種2～3週間後に一過性の耳下腺腫脹や発熱がみられることもある。また、まれに髄膜炎の報告もある。
各0.5mL (10歳未満0.25mL)	皮下又は 筋肉内（10歳未満は皮下）	・ (1) では出生直後（生後12時間以内を目安）に抗HBs人免疫グロブリンを通常0.5～1mL筋注 注3）。 ・ 必要に応じて追加接種を行うことが望ましい。 ・ (3) ではHBe抗原陽性の血液汚染事故の場合は抗HBs人免疫グロブリンを併用する。健康保険適用。職業上の場合は労災保険適用。 ・ 血友病患者にB型肝炎の予防の目的で使用する時は健康保険適用。
各0.5mL	筋肉内又は皮下	
0.5mL	皮下	・ 授乳中の女性には接種しないことが望ましい。やむを得ず接種する場合には授乳を避けさせる。
各1.0mL	筋肉内	・ 接種要否は世界保健機関（WHO）の推奨も参考に検討する。 ・ 咬傷等の曝露を受けた場合には、以前に曝露前免疫を完了した者であっても、必ず曝露後免疫を行う。
各0.5mL	皮下又は 筋肉内	
0.5mL	筋肉内	・ 2歳未満の小児、56歳以上の者への有効性、安全性は確立していない。
0.5mL	皮下	・ 学童期以降の百日せき予防目的（日本小児科学会推奨）。 ・ 就学前の百日せき抗体価が低下しているため、就学前の追加接種を推奨（5歳～7歳半）。 ・ 2種混合（DT）の代わりに3種混合ワクチンを接種してもよい（11歳～12歳）。
0.5mL	皮下	・ 野生株ウイルスが流行している国は少ない。ワクチン由来ポリオウイルスの発生が続いている国があり、ポリオ根絶にはなお時間を要すると考えられる。 ・ 各国において総回数にばらつきはあるが、4歳以降での最終接種を行う国が多い。わが国では1歳代が最終接種となっている。 ・ ポリオに対する抗体価が減衰する前に、就学前（5歳～6歳）の接種を推奨（日本小児科学会）
0.5mL	皮下	・ 明らかに免疫機能に異常のある疾患を有する者および免疫抑制をきたす治療を受けている者に接種してはならない。
各0.5mL	筋肉内	・ 水痘の予防接種に転用することはできない。 ・ 1回目の接種から2か月を超えた場合であっても、6か月後までに2回目の接種を行う。
各0.5mL	筋肉内	・ 1年以内に3回の接種を終了することが望ましい。2回目及び3回目の接種が初回接種の2か月後及び6か月後にできない場合、2回目接種は初回接種から少なくとも1か月以上、3回目接種は2回目接種から少なくとも3か月以上間隔を置いて実施すること。 ・ 本ワクチン接種に加え、子宮頸癌検診の受診やHPVへの曝露、性感染症に注意することが重要である。

より内側＜腔側＞には片寄らない）に行う（日本小児科学会誌90:415、1986）。